



# ピクタインダクン

(おきみがりにぼし)

第 30 号

発行日 2021年6月1日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

## バツケ

秋田の三月はまだ寒い

白い布団をかぶった

生きものたちは

地下で息をひそめている

雪どけの雫が

やさしさを刻むころ

生きものたちは目覚めの時を

地の温もりで感受する

光を集めた布団がうすくなり

雪の裏にみえる薄ら日に

芽生えるバツケ

顔をのぞかせたバツケの

ほころんだ花茎の指先に

黄緑の春が明るく点っている

\*フキノトウの秋田弁

## 雪山

冬日がさす

二月

雪深く

裸木は腰まで埋もれている

カーブミラーの天辺にも

手がとどく

しずかに

澄みきった

モノクロの景色

冷えが

足から伝わってくる

風のおき手紙か

山膚に

記された

風紋

のうえの

スノーロールの

オブリエ

より深く

足を踏みいれると

点々と

動物の足跡

花の足跡は

どこまでも

つづいている

休むことは

そこで散ること

足跡は

生の

深さで

沈み

窪みには

野生の

冬を生きぬく

気概

が

のぞいている

いままで見えなかった

雪の翳

動物の匂い

山の鼓動

が

きこえてくる

雪野原には

動物の

新しい排泄物も

雪に覆われた

見えない道

大きな足跡に

自分の足を

かさね合わせながら

進む

右手に

視線をむけると

静寂をつつみ込んだ

雪室から

勢いよく流れおちる

水の帯

冷え冷えとした

水しぶき

研ぎたての刀で紙を切るような

神々しい

白さ

時間をとられる

にわか

雨もよいの

県道からは

わたしの

墨汁を掃いたような雲

が

足跡

が

垂れてきた

雪山の記憶となっていた

下の方から

音がする

かすかに響いてくる

車のエンジン音

県道までは

そんなに遠くはない

急ぐ

が

濡れた

雪のおもてに



①

〈シヨミズ〉

知ってる？

馬に飲ませる

米のとぎ汁

長い間

耳底に眠っていた

ことばが次々と蘇った

厩まわ 敷き藁 飼馬桶はんぼ 馬草まぐさ

米糠 蹄鉄 馬櫓 鋤すき 馬柵ませ

湯気たつ馬糞

目に浸みる堆肥

めんこい仔っこ馬っこ

歯をむいて唸る馬の長い顔  
ひと声高くないななく荒々がんじしい馬よんま

あの頃は

家族6人

みんな揃っていた！

②

夫 おめえ

オレに隠しごどしてるべ

妻 え なんのごどだ？

夫 贅肉隠してるべ

妻 (腹に手をやる)

③

夜間尿

で目覚める

悪夢

で目覚める

70歳は忙しい！

④

電卓の数字が見えない

もう寿命かな？

新しい電池に交換しようとしたら

ちゃんと見える！

電卓ちゃんの

耳はどこ？

⑤

もの言わぬ木に

聴診器をあてる

樹木医

耳を澄まし

鼓動を聴く

あとは

愛をたっぷり

注入する

## 【詩の勉強会】

去る五月二十三日（日）、あきた文学資料館において、「第八回 ピッタの会」勉強会を開催した。

講師には見上司氏をお迎えし、演題は、「定型、歌と詩と小説と」。

参加者は講師を入れて七名。内、初めての参加者は一名であった。

\*

当初、新型コロナウイルスの感染が拡大するなかで、「ピッタの会」を開催できるのだろうか、開催してもいいのだろうか、と大いに迷った。

しかし、参加人数が少ない分、講師や参加者との交感がなされ、学生に戻ったような高揚感を覚えた。講師の詩に対する強い熱意が、直に伝わってきた。

熱心なご指導をいただける喜びに、また何歳になっても学べる幸せに、思わず胸が弾むのが分かった。

\*

### 付記

参加者が一人、二人……と減っていくなかで、あきた文学資料館は閉館しないことが分かった。コロナ感染防止をしつかりすることは当然であるが、このような状況下でも活動できる場所があるのはとても心強い。

テーブルの消毒等、安全対策に努めておられるあきた文学資料館の職員の皆様に感謝の気持ちでいっぱいである。

次回はコロナの感染が収まり、安全で安心な環境下で開催できるようにと願っている。



## ●講演内容

### 1. 三つの歌

○好きな歌

○三つの歌 紹介

①安倍女郎 いづらぶ 万葉集 晦日つごもりの歌

わが背子は物な思ひそ事しあらば

火にも水にもわれ無けなくに

②和泉式部 後拾遺和歌集

白露も夢もこの世もまぼろしも

たとへて言へば久しかりけり

③西行 山家集

春風の花をちらすと見る夢は

覚めても胸のさわぐなりけり

### 2. 五音と七音：詩の中で

○見上司詩集『野擦の歌』

14行詩 ソネットへの思い

○音楽鑑賞

ユーチューブで見た最近のお気に入りの音楽を、映像で楽しんだ。

①カナダのカントリーソング

②ドイツの民族音楽

③バルセロナの映像

ベートーベンの「第九」の演奏風景

### 3. 散文への試み：小説へ

○「忘春譜抄」

資料として配付した「忘春譜抄」は、詩集の中の18編を散文詩にしたもの。

## ● 質疑応答

### ● 朗読

参加者の藤山鷹夫氏（松田富夫氏）が自作詩「宇宙の喜び」を朗読。

### ● アンケートより

・いい講演でした。コロナの関係で聞く人が少なかったのは、もったいなかったですね。映像の持つ力も改めて感じました。ソネットについては、もう少し聞きたかったところもあります。

・やはり生の声で聞くといいです。見上先生の詩

心の年季が感じられて、良かったです。「言葉」の力について、音楽と比べて考えられていること、私も考えたいと思いました。カナダのグループのようなのが、三種町の教え子さんたちから出てこないかな。

・詩と小説が近いものだとは考えたことがなかったのですが、新しい見方を得ることができました。映像や音楽から刺激をもらうことも詩作のヒントになると知りました。大先輩のお話、とても勉強になりました。ありがとうございます。

・年に一回か二回の講習ですので、何をおいても出席して勉強したいと思います。あまりよくわかりませんが、短歌、俳句、詩と文章と、本を買って勉強をしても、虻蜂取らずになるんじゃないかと……。今日は先生のすばらしさに感動致しました。



【ご案内】

矢代レイ 詩展 ― 詩を楽しむ ―

日時 7月1日(木) ～ 7月30日(金)

時間 9時～15時 無料

場所 秋田銀行本店 ロビー

秋田市山王3-2-1

なお、土曜日、日曜日、祭日はお休みです。  
お問い合わせは、矢代レイまで。

☎ 090・1935・1180

## 【あとがき】

今号で、「ピットインダウン」は第30号を迎えた。創刊から5号、10号、15号…と未知の階段を一步上がる気持ちで号を積み上げてきた。

刊行は、詩想が途絶えるその時までの一つの通過点と捉え、これまで通り喜びのなかに詩作品を生み出していきたい。

\*

秋田魁新報（3月13日付）に「瀉の文学散歩49」（高橋秀晴氏）が掲載された。「冷淡な態度、詩で一変」の見出しが目にとまった。

三好達治は八郎瀉を、へただ廣いばかりののつべら坊の水溜り〜と、紀行文に書いている。が、「八郎瀉」と題する詩では一変、鮮やかに変容している。実に面白かった。

また、へあはれ花びらながれ／をみなごに花びらながれ〜と、春のうららの境内を詠った達治の「登のうへ」が取り上げられてもいた。

この詩は、「第一回ピッタの会」の講師・前田勉氏が「詩との出会い」で引用した詩でもある。

前田氏は、中学3年時の国語の授業でこの詩と出会い、この授業が詩に近づけた大きな出来事となり、詩の出発点にもなったという。

現在、「さきがけ詩壇」の選者を務めているが、卓越した精緻な評から学ぶことが多い。

